

「同化」は悪か？  
——現代アメリカの移民問題に関する一考察——

伊 藤 豊

山形大学大学院  
社会文化システム研究科紀要 第6号 別刷  
平成21年8月

## 「同化」は悪か？

### ——現代アメリカの移民問題に関する一考察——

伊 藤 豊

(文化システム専攻欧米文化領域担当)

#### 問題の所在

本稿における「同化 (assimilation)」とは、移民やその子孫たちが自身の移り住んだ社会やコミュニティへと馴染んでいき、やがてはその自覚的な成員と化していく現象ならびに過程を指す。ただしこのような「同化」は価値中立的な用語ではなく、しばしば否定的な意味を含んでいる。例えば多文化主義を基調とするアメリカの言論において、同化は「みずからの文化的な、そしてエスニックな一体性を保持しようと格闘している様々なマイノリティ集団に対する、エスノセントリックで高飛車な押し付け」であると、通常は理解されている。<sup>(1)</sup> つまり同化とはマイノリティに対する、マジョリティの文化や生活様式の強制であり、ゆえに反多文化主義的な悪行とされるのが、現代アメリカでの一般の趨勢だと言えよう。

しかし移民に同化を要求することなく、彼らとともに一つの市民社会や国家を形成することが、はたして実際に可能なのか。また同化とはそもそも、糾弾に値するほど抑圧的な本質を有するものなのか——私自身は、移民の同化をもたらす手段の善し悪しについては、様々な議論があり得ることを認める一方で、同化の必要性自体は肯定する他にはないと考えている。本稿ではこうした立場から、アメリカ合衆国で移民をめぐる現れた同化擁護論のうち注目すべきものを選び出し、その内容を紹介・検討してみたい。

#### 「同化」の意味——T・ローズヴェルトの「ハイフン付アメリカ人」批判

1915年10月12日、第26代アメリカ大統領を務めたことで知られるT・ローズヴェルトは、ニューヨーク市のカーネギー・ホールで開催された、カトリックの友愛組織であるコロンブス騎士会の集會にて、いわゆる「ハイフン付アメリカ人 (hyphenated Americans)」についての有名な演説をおこなっている。ハイフン付アメリカ人とは、例えば German-Americans や Irish-Americans などに見られるように、ハイフンによって語頭に付される言葉で、移民の故国や出身地を示したものである。

ただし本演説におけるローズヴェルトの用法によれば、ハイフン付アメリカ人とは、単なる外国生まれのアメリカ人や移民を指す言葉ではない。ローズヴェルトはハイフン付アメリカ人を論じるにあたって、「アメリカニズムとは精神と魂の問題である」ことを、まず強調する。「我々の忠誠心は合衆国に対してのみ、向かわねばならない」。よってアメリカで暮らしながらも、「他国への忠誠心を奉じる」移民がいるなら、我々は彼らを「厳しく断罪しなければならない」。一方で、ある人物がアメリカという「共和国に対して、心から誠実に忠節を尽くすならば、生まれが世界のどこであろうが、彼は他の皆と同じく、まさに善きアメリカ人なのである」<sup>(2)</sup>。

ローズヴェルトの言うように、善きアメリカ人

(1) Richard Alba, Victor Nee, *Remaking the American Mainstream: Assimilation and Contemporary Immigration* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 2005): 1.

(2) "Americanism: Address Delivered before the Knights of Columbus, Carnegie Hall, New York, Oct. 12, 1915," in Theodore Roosevelt, *Fear God and Take Your Own Part* (New York: George H. Doran Company, 1916): 361-361.

であること、あるいはハイフンなしのアメリカ人であることが、まずもってアメリカへの忠誠心の問題ならば、そうした忠誠心とは、具体的にはどのような形で実現されるべきものなのだろうか。ローズヴェルトの答えは、以下のように明快である。

この国にいる外国生まれの人々は、アメリカ化されなければならない。……彼らはアメリカ生まれの他のアメリカ人たちと、同じ言葉を話さなければならない。彼らはアメリカの市民権と、アメリカ的な理想を有さなければならない……。彼らは言行ともに、しっかりと忠誠の宣誓を守らなければならない、みずからが王侯や外国政府への忠節を排したという事実自体によって、それを示さなければならない。重要な工場で大事な時期に労働争議が起こることを防ぐべく、彼らの生活はアメリカの水準で維持されなければならない。移民の植民地や貧民窟そして移民地区が存在する限り、また我々が殊更に移民を産業財と捉えている限り、上記の目標はどれも実現されないのである。<sup>(3)</sup>

アメリカ人としての忠誠心と、移民をアメリカ国民の組成へと取り込む「同化」の理念は、ローズヴェルトの演説において明らかに表裏を成している。彼の立場から言えば、「～系アメリカ人」という意識を脱して積極的に同化しようとする移民は、単なる「産業財」では決してなく、よって共和国の平等な市民として遇されるべき存在である。一方で、同化を拒みハイフン付アメリカ人であり続けようとする移民は、それだけですでにアメリカの潜在的な敵である。「アメリカ国民がドイツ系アメリカ人として、アイルランド系アメリカ人として、あるいはイギリス系アメリカ人として投票するならば、それはアメリカ的な制度に対

する裏切りである。外人としての投票を通じてアメリカの政治家を脅かそうとする、これらハイフン付アメリカ人たちは、アメリカ共和国に対する大逆の罪を犯している」。アメリカに移民した以上は、彼らはハイフンによって故国の残滓を引きずることなく、心からアメリカ人と化さねばならない。「善きアメリカ人であるハイフン付アメリカ人など、いっさい存在しない。善きアメリカ人とはまさにアメリカ人であり、他の何者でもない人物のことなのだ」。<sup>(4)</sup>

### アメリカ人になること——「我々」と「彼ら」の線引き

以上で紹介したローズヴェルトの演説は、アメリカにおける移民の同化が、例えば英語を流暢に話したり、また周囲の人々や社会に同調するといった表層的な次元を越えた、特殊アメリカ的な理念や制度への忠誠心を問われる問題であったことを、如実に示している。移民を単なる一時的な労働力とみなし、ゆえに精神や信条の面での同化の程度を、必ずしも第一義的な問題とは捉えない国々と、アメリカ合衆国ならびにその移民への態度は、この点において決定的に異なる。

アメリカにやって来て、そこに生活し続けることを選択した移民たちが、同化を達成して完全にアメリカ人となることを期待されるのは、少なくとも理念型としての「アメリカ人」なるものが、究極的には血統や人種などの肉体的な特徴に基づかないという理由による。M・スボルディングの表現を借りれば、「例えばどんな民族的あるいは人種的な出自を有する外人でも、合衆国に移民することができるし、完全にアメリカ人となることができる。自由な政府の存立を根本から可能としている、共有の政治的諸原理に由来するのは……人々の多様な生き立ちに対する、また宗教的なものを含んだ意見の相違に対する、まさに開かれた自由なのであり、だからアメリカでは、外人が真

(3) Ibid., 372-373.

(4) Ibid., 364, 362.

にアメリカ人となることが可能なのである」<sup>(5)</sup>

換言すれば、アメリカ人になるとは、アメリカ的な諸々の信条を受け入れ、それらに忠誠を誓うという、個々の移民による合意の問題である。ここには二つの重大な問題が孕まれている。一方で、特定の理念への共感と忠誠心を基盤とすることで、アメリカのナショナリズムは肌の色や人種などの先天的な要件を超えて、万人をその参加者として受け入れるといった、いわば開かれた可能性を有している。他方、各人がある理念を信奉する際に、彼らの内面や精神が重要視されることも、またしばしばである。受け入れ側の集団にとって、移民が「我々」の一員になるとは、たとえば自分たちと同じ言葉や習慣といった外面的な特徴のみを、「彼ら」が受容することにとどまらない。移民の同化とは単なる外見を超えた問題であり、移民の心がこの地に深く根付いていない場合、彼らはアメリカ化しておらず、つまり彼らはアメリカ人の国民意識を有するには、至っていないわけである。

新来の移民をめぐる「我々」と「彼ら」の線引きは、むろん過去と現在では大きく異なる。いまではヨーロッパ系と一括される人々の間にさえ、こうした線引きはかつて厳然と存在した。そもそも自由と平等の国であるはずのアメリカの、建国の父祖の代表的な人物として知られる B・フランクリンは、「我々の言語や習慣を決して受け入れない」ドイツ系移民が、ペンシルヴァニアで急速に増加していく状況に、以下のような深刻な憂慮を表明していた。「イギリス系移民によって建設されたペンシルヴァニアが、なぜ『異邦人の植民地』と化すべきなのだろうか。これらの異邦人たちはまもなく膨大な数に達し、我々が彼らを英米化する (Anglifying) どころか、彼らが我々をドイツ化してしまうであろう」<sup>(6)</sup>

排除や差別の対象となったのは、別にドイツ系

移民に限ったことでなく、別のエスニック集団や、西ヨーロッパからのカトリック移民一般にまで及んだ。しかしカトリック移民に対するプロテスタント住民の反発も、結局は同化を通じて乗り越えられ、やがて彼らも等しく「アメリカ人」とみなされていく。続いて新たに「彼ら」として認識された、1880年代以降に増加していく南ヨーロッパや東ヨーロッパからの移民も、世代を経るにつれて最終的には、「我々」の内部へと取り込まれていった。流入する移民の同化という、こうした歴史の延長線上に成立した現代のアメリカにおいて、アメリカ人としての「我々」概念を構成する人々が、過去と比べて実に多様化していることは、ここに改めて論じるまでもない、明白な事実であろう。

### 「移民の国」における同化と多様性

「我々」の祖先は様々な国からやって来た移民であり、したがってアメリカがその本質において、多様な「移民の国」なのだという認識は、今日のアメリカのみならず、他の国々のアメリカ観においても、一般的なものである。しかし例えば S・ハンチントンには、アメリカが元来「移民の国」であるという通念を、史実に反するものだと断じている。ハンチントンによれば、アメリカの文化的な原基を形成したのは、最初に新大陸に移住して植民地を建設した「入植者 (セトラー)」の一群であり、その後の移民たちは、先行する居住者が規定した「アメリカ人」という枠組みの内部へと、同化していったにすぎない。「のちに移民がやってきたのは、入植者が築いた社会に加わりたかったからだ」と、ハンチントンは喝破する。「入植者とは異なり、移民とその子孫は、自分たちがもちこんだ文化とはおおむね相容れない文化を吸収しようと試みるなかで『カルチャー・ショック』を味わった。移民がアメリカにくるためには、そ

(5) Matthew Spalding, "Making Citizens: The Case for Patriotic Assimilation," *The Heritage Foundation's First Principles Series*, No. 3 (16 March 2006, Internet, [http://www.heritage.org/Research/PoliticalPhilosophy/upload/95152\\_1.pdf](http://www.heritage.org/Research/PoliticalPhilosophy/upload/95152_1.pdf)): 4.

(6) Albert Henry Smyth, ed., *The Writings of Benjamin Franklin*, Vol. 3 (London: Macmillan & Co., 1907): 72.

の前に入植者たちがアメリカを築いていなければならなかったのである」。<sup>(7)</sup>

移民にとっての同化の対象である、元々の「アメリカ」を創造したのが、ハンチントンの言う「建国の入植者たち（ファウンディング・セトラーズ）」だというのは、なるほどそのとおりであろう。ただし上記の事実を根拠として、「アメリカの中核にある文化はこれまでも、また現在もなお、主としてアメリカの社会を築いた17世紀および18世紀の入植者たちの文化である」と結論するのは、やや言いすぎの感もある。<sup>(8)</sup> なぜなら、ハンチントンの分析は史実に即したものである一方で、「建国の入植者たち」の形成したアメリカ人の原基が、その後の移民の流入によって根底的に覆されることはなかったにせよ、否応なく多様化したというのも、また否定できない事実であるからだ。様々な民族的出自と文化を背負った移民たち（彼らの多くを占めるのが、少なくとも20世紀初頭までは大まかに言ってヨーロッパ系であり、一方で非ヨーロッパ系の移民はマイノリティにとどまったという、歴史的な限界はあるにせよ）が、特定の理念への忠誠を誓い、アメリカと運命を共にすることを選びとったという、まさにその過程を通じて「アメリカ人」が形成されたわけであり、この意味でのアメリカは、やはり「移民の国」として捉えるのが適当なように思われる。

したがってアメリカが「移民の国」であるという言い方には、同化と多様性という2つの概念が内包されている。つまり多様な移民はアメリカ的な制度への忠誠を誓うことによって、均質な理念を奉じる「アメリカ人」と化していくわけであり、同化というプロセスを通じて、「彼ら」は「我々」の中へと組み込まれ、それによってアメリカ人であるという国民意識が成立するというのが、アメリカ的な同化のダイナミズムの概略である。

## 「多様性」への疑義

さて今日のアメリカでは、上記のような同化の問題について、様々な識者が重大な疑義を呈している。彼らは概して、これまで移民を同化してきたシステムが、もはや十分に機能し得ず、またそうしたシステムの機能を可能としてきた外的な環境が、根本から変わってしまったと論じる。

例えば、移民はアメリカ社会に多様性を持ち込む重要な契機であると、これまで一般に想定されてきたが、こうした移民と多様性の必然的な連関を徹底して疑問視するのは、保守派のM・クリコリアンである。アメリカへと流入する今日の移民が、様々な国や地域からやって来ていることは、なるほど事実であろう。ただしそうした移民の群も、内実をみれば多くがメキシコ系という「単一のエスニック集団」であると、クリコリアンは指摘する。メキシコ系移民は合法、非合法移民の両者を合わせて、アメリカ合衆国における移民総人口の実に31パーセントを占め、また1990年代に増加した移民の総数のうち、43パーセントがメキシコ系であったという。「メキシコ系移民は1200万人に上り、次位10ヶ国からの移民の合計よりも多いのである」。

さらにラテンアメリカ全体からのいわゆるヒスパニック系移民について考えてみれば、その数は膨大なものとなる。これらヒスパニック系移民の出身国だけをみれば、確かにいろいろな地域に散っている一方で、彼らはスペイン語を第一言語とするという点において、特定の文化的なアイデンティティを共有する集団だと考えられる。1990年代には、ヒスパニック系は移民人口の増加分の60パーセント以上に達し、32州で最大移民集団となった。クリコリアンはこうした状況を踏まえて、「現今の移民における多様性の欠落」を指摘しているわけである<sup>(9)</sup>

(7) サミュエル・ハンチントン『分断されるアメリカ』（集英社、2004年）、66頁。

(8) 同上、67頁。

(9) Mark Krikorian, *The New Case Against Immigration: Both Legal and Illegal* (New York: Sentinel, 2008): 17-18.

世紀転換期の移民の大波について言えば、言語の多様性は移民という現象を構成する、主要な要素の一つであった。かつての移民はその出身地から、様々な言語を新世界における自身の生活の場へと持ち込んだ。個々の移民コミュニティの中では、ドイツ語やイタリア語、スカンディナヴィア諸語、ポーランド語、さらにはイディッシュに至るまで、彼らの故郷で流通する言語が、しばしば日常的に使用された。一方で現代の移民の多くが第一言語として用いているのは、スペイン語という単一の言語であり、この点で移民としてのヒスパニックが、移民について従来は自明視されてきた「多様性」なるものの源泉たり得るかどうかは、確かに疑問とされても不思議ではない問題である。

ヒスパニックを単なる言語集団と捉えるか、それとも言語のみに還元できない一種のエスニック集団とするかは、議論の分かれるところであろう。いずれにせよ、ヒスパニック系移民の大量流入は、彼らが英語を十分に習得することなく、自身のコミュニティの内側で自足しつつアメリカ社会で暮らしていけるという、従来の移民にとってはまずあり得なかった生活条件を生み出したという点で、これまで機能してきた同化モデルに見直しを迫る、大きな契機となっている。彼らが合衆国の内部で「ヒスパニック民族 (Hispanic Volk) という独立したナショナル・コミュニティ」<sup>(10)</sup> を形成しつつあるというクリコリアンの指摘は、いささか極論かもしれないが、一方で彼らの多くにとって、ヒスパニックであることが一つの文化的アイデンティティとして、日常生活で機能しているというのは、否定できない事実だと思われる。

前出のハンチントンが著書の中で紹介する、メキシコ系移民の子供のアメリカに対する帰属意識の著しい低さは、上記の趨勢を実証する一例と言えよう。1992年に移民の子供を対象として、南カリフォルニアと南フロリダで実施されたアンケート調査によれば、みずからを何と呼ぶかと問われ

た際に、「メキシコ生まれの子供は誰も『アメリカ人』と答えなかった」一方で、彼らの「41.2パーセントという最多数が自らを『ヒスパニック』だと見なしており、次に多い32.6パーセントは『メキシコ人』を選んだ」。またアメリカ生まれのメキシコ系の子供のうち、最多数である38.8パーセントは自身を「メキシコ系アメリカ人」と呼び（ちなみに、単なる「アメリカ人」であるとした者は、全体の3.9パーセントにすぎなかった）、次の24.6パーセントが「チカーノ」を、そして20.6パーセントが「ヒスパニック」を、己の帰属を示す呼称として指定した。アメリカ生まれのメキシコ系の子供でも、自分を「メキシコ人」とする者は8.1パーセントに達しており、「メキシコ生まれであれアメリカ生まれであれ、メキシコ系の子供の圧倒的多数は、本来はどこの国の人間かという問いにたいし『アメリカ』を選択しなかったのである」<sup>(11)</sup>

クリコリアンやハンチントンが述べるように、合衆国へと流入する現代の移民が、ヒスパニック系によって一種の寡占状態にあるのは、なるほど事実であり、したがって移民という現象に従来から結びついてきた「多様性」なるものが、必ずしも現代の移民の実相を反映する概念ではなくなっていることも、確かに認められなければなるまい。そして移民をめぐるこうした伝統的な多様性概念の喪失こそ、過去において有効であった同化モデルが、いまや機能しなくなっている、まさに主要な原因の一つとみなされるのである。

### 「新たな移民の潮流」と国民意識の危機

1998年7月19日付の『ニューヨーク・タイムズ』には、「新たな移民の潮流」と題された、以下のような記事が掲載されている。

現代の移民にとって、故国とはもはや捨て去ったり、仄かな記憶や郷愁へと化してしまうよ

(10) Ibid., 19.

(11) ハンチントン, 337 - 338 頁。

うな類のものではない。世界がだんだん小さくなるとともに、移民の経験も必然的に変化した。20世紀前半、戦争と迫害を逃れてやってきたヨーロッパ系移民とは異なり、現代の移民の中で生まれ故郷を完全に捨て去り……二度と振り返ろうとしない者はまれである。むしろ現代の移民は、彼らの出身地と金銭的な余裕の別により、様々な次元で2つの世界にまたがっている。<sup>(12)</sup>

上記の描写は、移民という現象をめぐる環境や条件がすでに1990年代において、かつての大移民時代とは大きく変化していたことを、如実に伝えている。移民の出身地を見れば、それは第三世界へと明らかに移行している。同化擁護論者にとって、こうした事態はしばしば憂慮の種であった。例えば保守系言論人として知られるP・ブライムロウは、過去の移民が概してヨーロッパ系であったという事実を根拠として、1990年代以降の移民の大波を、従来とは根本的に違った新たな脅威であると論じている。なるほど、世紀転換期における移民の大波を形作ったのは、基本的にはヨーロッパからやって来た人々であり、当時の移民人口のほとんどは、彼らによって占められていた。これに対して、現在の移民の多くは、いわゆる発展途上国から移住してきた人々であり、しかもそこには、膨大な数の不法移民が含まれている。9.11以降にいっそう顕著化したこのような状況は、同じく保守派のP・ブキャナンに言わせれば、「第三世界の侵略」による「アメリカの征服」であり、よって糾弾されるべきものなのである。<sup>(13)</sup>

ブライムロウやブキャナンなどの保守派がこうした警鐘を鳴らすのは、移民の主な出身国が第三

世界へと急速に移行しているという事態の中に、アメリカ人の国民意識の形成に対する重大な阻害要因が潜んでいると、捉えられているからである。移民をめぐる現況は、1世紀半前の大移民時代と比べても、著しく変化している。いわゆるグローバル化によって、アメリカを目指す移民は激増したわけだが、これらの移民を一つの国民という枠組みへと馴致し、「アメリカ人」としての意識を個人に植え付けるというのは、現在の移民人口の組成と規模を考えれば、なるほど困難な試みと言わざるを得まい。「第三世界からやって来る人々の大津波」によって、「この国はバラバラになるうとしている。いったいどの時点で、人種的な多様性が一種の社会的な無秩序へと転化するのか。こんな状態で、国民的な一体性をどのようにして確保できるのか」というブキャナンの言葉は、こうした危機感を典型的に表明したものであると言えよう。<sup>(14)</sup>

### 交通と帰属意識の希薄化

アメリカ人としての国民意識の形成を阻む要因として、さらに挙げられるべきものは、過去と現在との間の交通テクノロジーの差異であろう。アメリカに向かう際に、太平洋や大西洋を何日もかけて渡るしかなかった時代には、移民も相応の覚悟をもってアメリカへとやって来ていた。移民の故国はしばしば、アメリカから地理的に隔絶しており、したがって彼らもまたアメリカという新たな土地に住み着き、そこで生活のみずからの生存にとっての必要条件として、受け入れざるを得なかった。彼らはこうして「アメリカ人」となっていたわけであり、そこには選択の余地など事実上なかったのである。

(12) Deborah Sontag and Celia W. Dugger, "The New Immigrant Tide: A Shuttle Between Worlds," *The New York Times*, 19 July 1998 (Internet, <http://www.nytimes.com/1998/07/19/nyregion/the-new-immigrant-tide-a-shuttle-between-worlds.html?pagewanted=print>).

(13) Peter Brimelow, *Alien Nation: Common Sense About America's Immigration Disaster* (1995; reprint, New York: Harper Perennial, 1996), ならびに Patrick J. Buchanan, *State of Emergency: The Third World Invasion and Conquest of America* (New York: Thomas Dunne Books, 2006)を参照のこと。

(14) Buchanan, 240.

これに対して現代の移民は、アメリカに移住して以降も故国との様々なつながりを、維持しやすい状況にある。手紙での往信は電話やEメールに取って代われ、移民の多くは故国の家族や友人と、かなり緊密なコミュニケーションを保ちつつ、同時にアメリカで生活することができる。相当の日数を要した船旅（その後にはしばしば、長い陸路の旅が伴った）は、飛行機による比較的短時間の移動に取って代われ、移民は航空券を買う経済力さえあれば、いつでも気軽に帰国することができる。

合衆国と陸続きの地域からの移民ならば、故郷への帰国はさらに容易である。例えばメキシコとロサンゼルスとの間は、高速道路を通れば車で2~3時間の距離であり、また不法移民ならば、「3200キロにおよぶ……地面に引かれた線と浅い川によって区切られているだけの国境」を、単に歩いて越えればよい。こうして「国境の南にある世界との紐帯を強化する新参の外国人たちが、合衆国内のヒスパニック・コミュニティへと絶えず補充されている」わけである。<sup>15)</sup>

故国がアメリカとは地理的に隔絶されていたという事実によって、かつての移民の間で合衆国に対する帰属意識が自然に育まれたとするならば、現代の進んだ交通テクノロジーや、メキシコの場合に代表される移民の故国の地理的な近接性は、彼らのアメリカに対する帰属意識の発達を阻害する一大要因となっている。昔の移民にとって、アメリカで暮らしアメリカ人となり、そして最後はアメリカの土と化すのは、いわば運命であった。一方で例えば1996年には、ニューヨークで亡くなったドミニカ系そしてメキシコ系移民のうち、

その半数以上の遺骸が故国へと送られたという。<sup>16)</sup> いまや多くの移民は合衆国という異国に永住しつつも、従来とは比較にならないほど容易な形で、故郷との精神的な紐帯を維持できるのである。

## 二重国籍の問題

国境を越えて存在している、移民と故国との間の精神的なつながり、そして彼らの集団的なアイデンティティは、実のところ心の次元にとどまらず、しばしば二重国籍という形で、アメリカ社会において実体化している。S・レンションの分析によれば、1961年から2003年の間に渡来した移民のうち、80パーセントが二重国籍を容認する国々の出身であり、この事実からすれば、彼ら二重国籍者の人口は2600万人以上と推計される。さらにその子供や不法移民、そして二重国籍を取得したアメリカ人を加えれば、二重国籍者の総数はおそらく4000万人を超えており、しかも今後さらに増えていく勢いにあるという。<sup>17)</sup>

前出の記事「新たな移民の潮流」では、二重国籍という問題をめぐり以下のような話が紹介されている。コロンビア人移民のジーザス・ガルヴィスは、アメリカで市民権を取得した後、ニュージャージー州のある町で地方議会選挙に立候補し、当選する。ここまでならば、一人の移民がアメリカ社会へと同化を果たし、コミュニティの一員として根付くに至ったという、まことに結構な話なのだが、続きは意外な展開を示す。アメリカ人となったガルヴィスが、さらに母国コロンビアの上院議員選挙に立候補したからである。幸か不幸かガルヴィスは落選し、公人として二つの国家に仕える人物の忠誠心は如何、といった問題は追究されることはなかった。<sup>18)</sup>

ガルヴィスの試みは、極めて異例だったという

(15) ハンチントン、311頁。Victor Davis Hanson, *Mexifornia: A State of Becoming* (San Francisco: Encounter Books, 2003): 22. かつて私は、ここで挙げたハンチントンとハンソン、そして前出のプライムロウを合わせて、彼らの言論を反移民主義の諸相という観点から、比較検討したことがある。伊藤豊「現代アメリカの反移民主義——国境を越える文化の創造と、アメリカという『夢』の行方」(『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』, No.3, 2005年)を参照のこと。

(16) “The New Immigrant Tide.”

(17) Stanley A. Renshon, *The 50% American: Immigration and National Identity in an Age of Terror* (Washington, D.C.: Georgetown University Press, 2005): xix.

(18) “The New Immigrant Tide.”



わけではない。実際、「新たな移民の潮流」では、ニューヨーク市議会での議席を狙いつつコロンビアでの選挙活動もおこなっている、別の移民の話が紹介されている。<sup>(19)</sup> こうした事例が大新聞である『ニューヨークタイムズ』で、論じるべきニュースとして報道されたということ自体、二重国籍を有する移民がアメリカにおいて、すでに日常的な存在と化しており、したがって同じような出来事が頻発しかねないという憂慮が、多くの一般市民の関心を集めるものだとすることを、如実に反映していた。

二重国籍とは例えば、ある個人が二つのパスポートを使い分けるといったような、便宜的な次元の話にとどまるものではない。移民がアメリカへと帰化する際に要求される「忠誠の宣誓 (Oath of Allegiance)」は、その大時代な文言に鑑みても、平時においては形骸化していると言えるのかもしれない。<sup>(20)</sup> しかしアメリカという国家が、例えば戦争といった国を挙げての非常時に直面した場合、二重国籍を有する人々の「複数の忠誠心」が問題とされるのは、むしろ当然のことではなかろうか。だからこそ T・ローズベルトは、二重国籍を「自明の不条理」と評したわけであり、またそれがアメリカの国民的な一体性に及ぼしかねない「腐食的な影響」を、現代の保守派が憂慮する理由もそこにある。<sup>(21)</sup>

### 文化的自信の喪失と脱アメリカニズム

移民を精神の次元で、つまり自身が根付こうとする国家や国民に対する忠誠心の次元で、アメリ

カというネイションの組成へと取り込んでいく試みは、交通やコミュニケーション・テクノロジーの発達によってのみ、その存立を脅かされているわけではない。移民の同化を阻む一大障害として同定されるのは、外的あるいは環境的な要因のみならず、かつての「我々」が有していた文化的な自信の揺らぎ、あるいはその喪失でもある。建国の父祖たちにとって、アメリカという共和国の未来が、A・ハミルトンの言う「国民的な精神と国民性の保持」にかかっていることは、ほとんど自明の真理であった。<sup>(22)</sup> このような立場から、例えば J・Q・アダムズは新来移民に対して、「ヨーロッパの皮衣を脱ぎ捨てる」ことを求めた。故国を去りアメリカへとやって来た移民は、「自身の祖先を顧みるのではなく、その子孫へと目を向けなければならない」。それこそが彼らが新天地へと根付き、「アメリカ人」となるための第一歩であった。<sup>(23)</sup>

現代はこれとは対照的に、移民に対して「アメリカ化」を推奨することは、彼らの体現している「多様性」を抑圧する悪行として、しばしば断罪される。前出のハンチントンとクリコリアンによれば、移民の多様性を擁護しつつ「アメリカ化」に反対する態度は、いわゆるエリート層（教育水準の比較的高い人々や、知識人、言論人など）において、最も顕著に観察される。彼らエリート層は必ずしも反アメリカ的 (anti-American) な立場を標榜するわけではないにせよ、あからさまな

(19) Ibid.

(20) 「忠誠の宣誓」の冒頭は、以下のようなものである。“I hereby declare, on oath, that I absolutely and entirely renounce and abjure all allegiance and fidelity to any foreign prince, potentate, state, or sovereignty of whom or which I have heretofore been a subject or citizen…” (Internet, <http://www.uscis.gov/portal/site/uscis/menuitem.5af9bb95919f35e66f614176543f6d1a/?vgnextoid=931696981298d010VgnVCM10000048f3d6a1RCRD&vgnextchannel=d6f4194d3e88d010VgnVCM10000048f3d6a1RCRD>)

(21) Roosevelt, 291; Krikorian, 34.

(22) Alexander Hamilton, “The Examination of Jefferson’s Message to Congress of December 7, 1801,” No. IX (1802),” in John Church Hamilton, ed., *The Works of Alexander Hamilton: Comprising His Correspondence, and His Political and Official Writings, Exclusive of the Federalist, Civil and Military. Published from the Original Manuscripts Deposited in the Department of State, by Order of the Joint Library Committee of Congress*, Vol.7 (New York: Charles S. Francis & Company, 1851): 778.

(23) Letter from John Quincy Adams to Baron von Fürstenwaerther, 4 June 1818, cited in Milton M. Gordon, *Assimilation in American Life: The Role of Race, Religion, and National Origins* (New York: Oxford University Press, 1964): 94.

ナショナリズムとは意識的に距離を置き、移民の「アメリカ化」の核心に存するべき特定の価値観には、決してコミットしようとしな。こうした「脱アメリカ的 (post-American)」な態度は、「エリート・トランスナショナル族 (elite transnationals)」の間で典型的に観察される。エリートたちにとって、アメリカというネーションやそれに対する愛着は、せいぜい二義的なものであり、むしろ一種のコスモポリタニズムこそが、彼らに共通する信条と化しているという。<sup>24</sup>

### 多文化主義、アファーマティヴ・アクション、そして「弱者」の問題

さらに言えば、上述の脱ナショナリズム＝脱アメリカニズム的な志向は、いまや多文化主義という形で、アメリカ社会における支配的イデオロギーへと転化している。F・フクヤマの指摘によれば、多文化主義とは単なる文化的な多様性への寛容を求める運動のみならず、「エスニック集団や人種や宗教集団といった少数者の権利の、法的な承認への要求」でもある。後者の意味での多文化主義は、ほぼすべての近代民主主義体制において多小なりとも定着している一方で、アメリカの多文化主義は、特に様々なマイノリティ集団の権利の承認という点で、他の先進国と比べてかなり特異な状況を呈している。「かつては周縁化されていた諸集団は、個人としての彼らの権利のみならず、集団の成員としての権利を要求することによって、アファーマティヴ・アクションやバイリンガリズムや同性愛結婚などをめぐり、諸々の論争を展開してきた。アメリカの政治は過去30年にわたり、このような論争によって占められてきたのだ」。多様な「他者」にアメリカ的な価値観や生き方を強制することなく、むしろそうした「他者」を社会の中で正当に認知あるいは承認すべきという運動は、もはや移民にとどまらず、いまや女性や同

性愛者や心身障害者やその他の「マイノリティ」全般を、その擁護の対象とするに至っている。<sup>25</sup>

前述のような種類の多文化主義と不可分に結びついたものとして、上の引用にもある「アファーマティヴ・アクション (affirmative action, 積極的差別是正措置)」の問題がある。アファーマティヴ・アクションが浸透した現代のアメリカ社会においては、マイノリティであり、ゆえに弱者でもある(べき)自らの立場をより効果的に主張する者が、様々な恩恵を特権的に受け得るという、皮肉な事態がすでに現実化してしまった。H・D・グラハムはこれについて、一つの逸話を紹介している。アメリカに帰化し、カリフォルニアで個人事業を営むインドネシア移民の女性が、1988年にSBA (The Small Business Administration, 米国中小企業庁) に対して、マイノリティ特別枠融資を申請した。彼女は申請書の中で、自身が当初は新来移民として経済的な下層にありつつも、刻苦勉励によって自営業者へと成り上がり、ついにアメリカ市民権を得るまでに至った経歴を詳述し、みずからが融資に値する人物であることを強調した。しかしSBAは、インドネシア人がSBAによるマイノリティ集団の指定を受けていないという理由で、彼女の申請を却下してしまった。彼女は再び申請をおこない、結局は融資を勝ち得たのだが、以下の引用に見て取れるように、最初の失敗の後で彼女が選んだ戦略は、「申請書の語勢と主題を、アメリカでの移民の成功物語から、差別と人種の抑圧の強調へと変更する」ことであった。

他のインドネシア同胞と同じく、私の肌も黄色です。アジア・太平洋系アメリカ人は、自分たちではどうすることもできない差別的な慣行によって、長きにわたってつねに犠牲とされ (インドネシア系アメリカ人も、明らか

<sup>24</sup> Krikorian, 26; ハンチントン, 380頁。368 - 380頁も参照のこと。

<sup>25</sup> Francis Fukuyama, "Identity, Immigration, and Liberal Democracy," *Journal of Democracy*, Vol. 17 (April 2006): 9.

にこれら犠牲者の一員であります）、経済的な差別に苦しんできました。私の知るすべてのインドネシア系アメリカ人たちが、こうした窮状を経験しています。才能があっても、よい仕事にはめったに恵まれず、言葉と肌の色の壁が、上質の雇用と教育の機会を妨げています。インドネシア系アメリカ人には、事業歴は皆無なのです。<sup>26</sup>

アフーマティヴ・アクションが浸透した体制においては、たとえ非白人であっても、「抑圧されたマイノリティ」として公的に分類されていなければ、様々な点で公共福祉制度の受益者たり得ない。だとすれば、こうした制度を利用するために自らを「弱者」として売り込む者が出てくるのは、別に不思議な現象でもあるまい。一方で、「弱者」を量産しかねない前述のような社会構造が、移民の「アメリカ化」を妨げ、またマイノリティをそのまま固定化することにつながっているという感も、なるほど否めない。

### 同化理念の復権——結論にかえて

F・ハイエクはかつて、アメリカの学校教育が移民の同化に際して果たす役割を、以下のように高く評価していた。「もし公立学校制度を通じた『アメリカ化』という周到な政策を欠いていたならば、合衆国はこれほど有効な『人種の垣塙』とはならず、また極めて深刻な諸問題におそらく直面していたことは、かなり確かなように思われる」。<sup>27</sup>ハイエクの言葉を敷衍すれば、移民のエスニックな背景はそれとして認める一方で、徹底した同化を図るというのは、かつてのアメリカの学校教育で普通に見られる教育方針であった。V・D・ハンソンが指摘するように、昔のアメリカの教師は、メキシコ系移民の子供たちに厳しく英語教育を施

し、また彼らのスペイン語訛りを容赦なく矯正していった。きちんとした英語を操ることは、新来移民の子供たちがアメリカ市民として暮らしていくための、さらには「違和感を持たれずに社会の主流へと浸透」して、階級的な階梯を昇っていくための必要不可欠な条件であり、教師と生徒の双方にとって、それは議論の余地のない当然の前提であった。<sup>28</sup>

9.11 から現在に至るまで、対テロ戦争を遂行中のアメリカで、同化という理念は（少なくとも保守派の言論が及ぼす影響の範囲においては）一定の復権を果たしてきているように見える。ただしそうした現象が、かつてのような移民の徹底的な「アメリカ化」を招来するほどの情勢を示しているかと問えば、答えは否であろう。多文化主義が支配的なイデオロギーと化した1960年以降のアメリカにおいては特に、同化ならびにそれを擁護する言論はマイノリティに対する抑圧だと、一般に考えられてきたし、現在もその趨勢は続いている。

しかしながら、ここまで本稿にて展開してきた議論を踏まえて言えば、同化の本質を否定的な文脈でのみ捉えることが、そもそも妥当な認識であるとは、私にはどうしても思えない。人種やエスニシティの多様性は、しばしばアメリカの特色とされる一方で、多様性の基盤たるべき共通のアメリカ的な価値観を容認し、またそうした価値観へと移民が同化するのを推奨することは、同化した後の移民がアメリカ社会で他の成員と平等な公民になりうると前提する限り、はたして一概に責められるべき考え方なのか。同化が否応なしの強制であってはならず、またエスニック・アイデンティティのための余地が、つねに残されておくべきだというのは、なるほどアメリカ的な多様性という理念の一面を反映した主張であろう。ただし一方で、こうした余地の存在を正当化しているのは、

<sup>26</sup> Hugh Davis Graham, *Collision Course: The Strange Convergence of Affirmative Action and Immigration Policy in America* (Oxford University Press, 2003): 146-147.

<sup>27</sup> Friedrich August Hayek, *The Constitution of Liberty* (Chicago: University of Chicago Press, 1960): 377.

<sup>28</sup> Hanson, 91.

移民たちが特殊アメリカ的な理念や制度に対して忠誠を誓い、それらを公民としての自身の価値観の根底へと組み込むべきだという、一つの譲り得ない前提ではないのか——私がいまの時点で改めて考えてみても、このような疑問を拭い去ることは、どうもできそうにないし、また同化を断罪する多文化主義者がそれによく答えている実例も、寡聞にして知らない。

私は以上で、移民のアメリカ化を擁護する側の主張に沿いつつ、同化をめぐる諸問題を概観してきた。1990年代に始まり現在まで続く、そして近い将来に止むことがおそらく見込めない、移民の大波に直面するアメリカにおいて、そしてアメリカ人が自国を「移民の国」として今後も捉え続けようとする限り、従来は優勢であった多文化主義とは必ずしも相容れない、同化を強く肯定するこうした種類の言論が、今後も世論に対して一定の影響を及ぼしていくことは、自然の理であるように思われる。

（付記） 本稿は筆者が研究分担者として参加した、科学研究費補助金基盤研究（C）「グローバル時代のナショナリティに関する規範理論的な国際比較研究」（研究期間：2006年度～2008年度、課題番号：18530105）の成果である。

# The Assimilationist Discourse on Immigration in America: A Critical yet Sympathetic Analysis

Yutaka ITO

(Associate Professor, European & American Cultures, Cultural Systems Course)

“Immigrant Assimilation” is a concept to designate a sequence of phenomena and processes in which immigrant newcomers and their near descendents become conscious members of the host community by embracing its peculiar cultural values. The concept itself is simply descriptive and neutral, but it is often mentioned not in a value-free context but with more or less negative connotations. In the US, where multiculturalism has achieved ideological dominance since the 1960s, assimilation is usually understood as an ethnocentric imposition on various minority groups that are struggling to preserve their cultural identities against the homogenizing effects of mainstream society. Assimilation is thus condemned as an anti-multicultural act of evil because it represents the majority’s repression to enforce its values and lifestyles on the minorities.

While I admit there are certain merits in multiculturalism’s critical analysis of assimilation, my basic position in this article is pro-assimilation: Although there could be a wide range of arguments on the methods and techniques of how to assimilate newcomers into American society, immigrant assimilation per se is of intrinsic necessity and must be inevitable. How would it be possible for the American nation to maintain its civic society in cooperation with new immigrants if they were not required to embrace uniquely American institutions and values? In my opinion, the cohesion and stability of America as a democratic body politic would seriously be at stake if America’s assimilative social mechanism either ceased to work or even partially malfunctioned.

The point of this article is that assimilation is not such an oppressive conduct by nature as to be rejected categorically. From this standpoint, I intend to investigate the heretofore underappreciated potential of pro-assimilation discourses by examining a number of representative assimilationist arguments that have emerged in today’s America.